

FURISODE

© KAPUKI

KAPUKI

FURISODE



K A P U K I

振袖に、 未来を。

いままでの振袖は、

固定概念にしばられすぎてはいなかっただろうか。

伝統とは破壊と構築を繰り返して、革新されていくもの。

KAPUKIは、振袖の概念をアップデートしていく。

振袖は、成人式で着たら終わりではない。

振袖は、人生に寄り添っていく。

振袖は、時空を超えて受け継がれていく。

振袖は、モードの常識を変える。

振袖は、ミラクルを起こす。

振袖に、高揚感を。

振袖に、自由を。

振袖に、未来を。













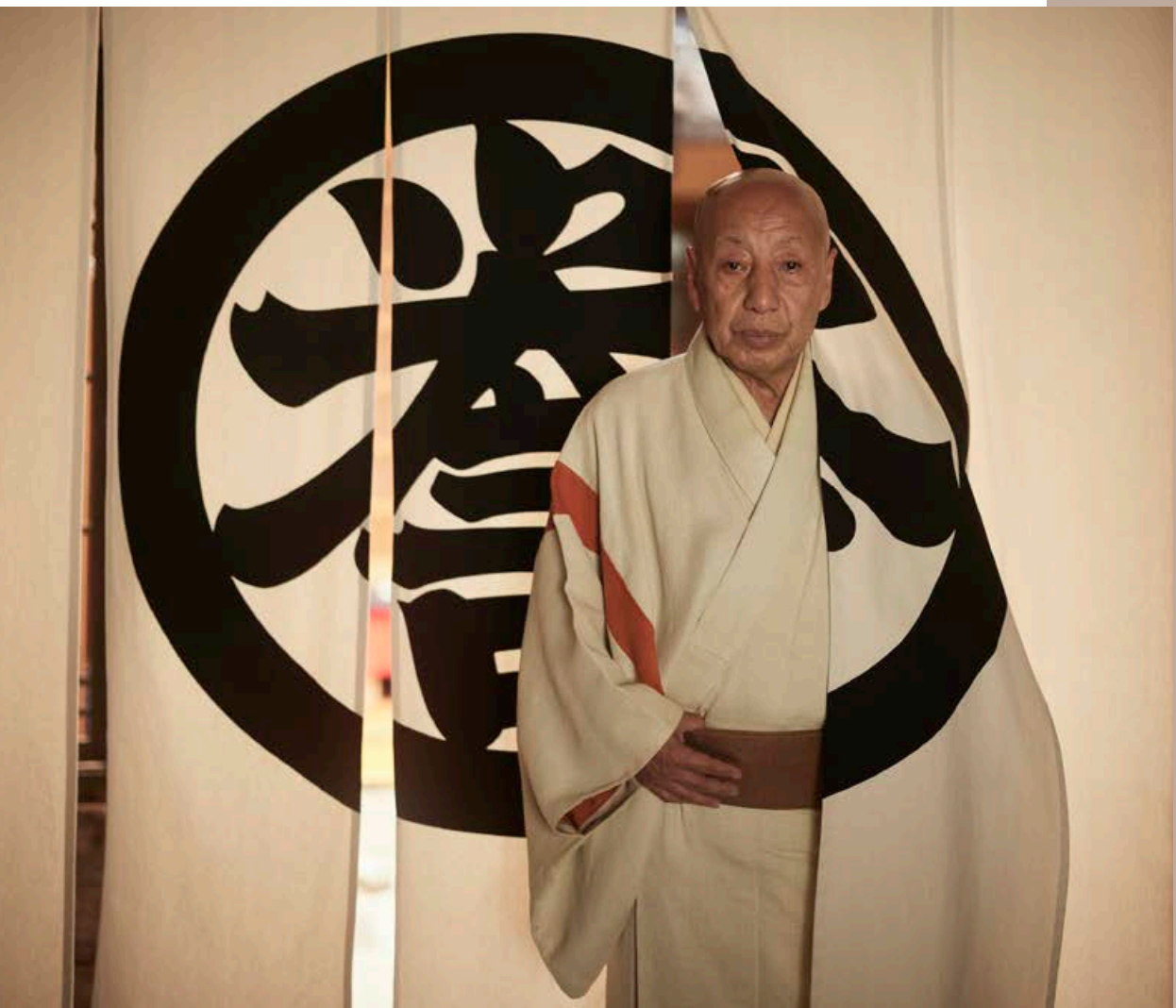
おもいおもわれふりふりそで。



ハタキは永遠。



山口源兵衛



着物の帯に、これほど深い宇宙が隠されているとは誰が想像しただろうか。

十代目菅田屋源兵衛、山口源兵衛氏。本業の帯製造のみならず、前衛舞踏家・田中泯の衣装を手掛け、ファッションデザイナー・コシノヒロコと建築家・隈研吾との展覧会に挑んだ後には、画家・松井冬子の絵を表現した帯を発表するなど、帯匠の創造領域を大幅に広げる活動をしてきた。2020年には羽織のフォルムから展開した新ブランド「NOBLE SAVAGE」を立ち上げ、モードのプロたちからも高い評価を受けている。

山口氏が十代目菅田屋源兵衛を襲名したのは、1981年。以後の40年は創業以来280年以上、代々受け継がれてきた帯の製造技術に革新の思想をかけ合わせていく凄まじい創造の歴史だった。

修業時代に見た正倉院展の「藁掃衣」に衝撃を受けて以来、原始布を探し求め帯の創作の道へと入る。金色の絹・マハラジャシルク「天蚕」を用いた帯を発表するなど、素材から意匠に至るまで独自の「帯」哲学を土台にした優れた作品を世に問い続けてきた。

氣い狂って死ぬ ような帯を作る

帯とは何か、着物とは何か。それらを貫く思想は古今東西を幅広く取材した末の確かな史観、立ち止まらない探究心によって編まれた、実に味わい深いものだ。

「最初の織物はどうやったかというのをやってんねん。けっこう面白い。地や根っこから出てへんことって、結局消えていくやん。宙に浮いたものって(例えれば)花や枝や葉っぱで、もともとは木があり根があるもの。俺なんかも最初は花や葉っぱで帯を作ってたんやけど、やっぱり寿命が短いよね、俺はセンスとかそういうことの上をやらんといかんと思ってる」。

「帯がいかに重要か。昔、講演で着物みたいのはどうでもよろしいよって言うたからね(笑)。あんなもん3年で終わりや言うて。3年でもう似合わないよになんの。帯は一生ものやねん。一緒に歳食う。そやから形見分けが帯なんよ。着物の形見分けってあらへんやで。着物は昔は着倒すもの。寸法も違うしやな」。

着物や帯の、色や素材も含めた女様には昔から霊力があつたと考えているそうだ。

「密かに思ってるのは、うちの社員もそこまで感じてくれてへんと思うけど、帯はご神体なんや。人間を守るご神体。ただの帯ではない。売れるとかなんかいうことは二の次、三の次やんか」。

「(だから)俺、実は昔から見えへんところにもう1色とか使ってる。言うたら無駄や。普通は見えるようにしはんねん。使った以上は見せな損やという。俺の作り方って、ものによっていろいろやけど、いっばい潜ますんよ。何をしてるか言うたら、その奥に何があるかという表現をしたいからなんよね」。

「俺の帯締めたら氣い狂って死ぬような、そんな帯作りたい。とれだけ影響を与えるかいう勝負なんや。そやから田中泯の衣装作ってんねや。あれは生意気にな、私の衣装は裸やって本に書きよったから、ほんまムカついたんや(笑)。おまえ衣装なめんなど。それで俺作り出したんや。狂わしたるわ言うてね」。

重要な文化が 刻み込まれた「袖」

創作の極地に日夜取り組み続ける彼の目に「振袖」はどう映るのか。

「振袖」の魅力を解く鍵を山口氏から得ようとした。

「着物は(長い歴史のなかで)ずっと形が変わってきている。袖をなんであんなに伸ばしたか。帯がなんであんなに長くなって幅が出たか。昔、大

衆が熱狂したのが歌舞伎やった。世の中、歌舞伎が変えるみたいな。その前は能とかそういう難しいものに皆、泣いたり笑ったりしたわけやろ。それが今でいうSNS、そういうメディアやから」。

日本随一の帯匠として「振袖」の取り組みは直接ないというが、文字通り「袖」とその変化には文化史が色濃く反映している、と説いてくれた。

「（長く垂れる）袖というのが昔から重要や。聖徳太子やらじゃらじゃらいっぱい垂らしとるやん。あれは、垂らすというのは金持ちである、権力がある象徴なのね。余ってまんねん、余裕ですわと。布が貴重やし。女が見れば、あの人は権力と金を持ってる、と分かる。それが『女垂らし』や。それが残ってるわけやな」。

「豊臣秀吉の朝鮮征伐のときに、九州の名護屋に城を作った。恐ろしい人数が溢れて行きよんのやからものすごい大変や。当然遊郭ができる。はっきり言って、全てのファッションが生まれるのは悪所や。宣教師が帯をぐるぐる三重巻きしとったわけ。日本の黒い着物着て禅僧がごついのぐるぐる巻いてる、ああいう格好を初めて宣教師がしたんよ。それ見て、うわーかっこええと遊女が真似して何重巻きというのが始まったんやね。文化はものすごい上か、ものすごい下から始まる。ジーンズ破るみたいなものや。ジーンズ破ってみっともない言うたんが、もう母ちゃんが2〜3年したら穿いとる（笑）。そんな感じよ。上から下りてくるものと、下から上ってくるものと、どっちかなんや。真ん中の人はそれにいつも影響を受けてる。普通というのは、もうほんとに何にも生まへんわけ」。

「振る」という行為の意味

節がある竹こそ風能耐えられる

お金が潤沢に余ってはいないはずの一般大衆にとって、優雅に見せる演出の振袖を着るのは、ひとつの勝負でもあったはずだ。衣で勝負する機会は人生でなかなかないこと。

「昔やったら振袖、高いの皆平気で買ったわけや。それは、節目という意識が強かったやんか。振袖を着られる期間もわずかやけど、その時期時期を大事にした」。

「僕は振袖を着るというのは、竹の重要な節やと思ってるのね。人生には節目があったわけや。その節目の最重要が振袖を着るということ。成人というのは昔はもっと年代が下やろうし、男は12歳から14歳ぐらいで戦争行つてんのやから、女性は8歳で結婚したり、今とは全然違う。七五三も還暦も今とは重みが違う。還暦なんて奇跡やからね。平均寿命が30代の時代に、還暦を迎えたいうたらすごいことや。今は還暦なんてなくなっていくわね。寿命が伸びたということも関係してるけど、とんとん節のない人生になってるわけ」。

「竹に節がなかったらどうなるか。節のない竹で実験したら分かるわ。風

現代人は鈍感だが、わずかな所作に多くの意味が込められ、表現されたのが日本人の美質だという。

「振袖は長い袖を未婚の人がつけて、あれは異性を呼んでる。私はまだ未婚ですと呼ぶんよ。間違うて違う男が勘違いして来たら『袖にする』というやつや。あんたちやうで、と。昔の人は今と違っていろんな所作にもものすごい敏感で、わずかな所作や、髪は烏の濡羽色、小股の切れ上がったええ女とかね。それを大阪では風姿のええ女って言うねん。そういうちょっとした所作、振袖が風にたなびくとか振り返るとか、そのときのトータルでの女の美しさやったわけ。そういうものに今、みんなが鈍感になってる」。

「昔は感情表現がみんな袖で察知できたわけ。結婚したら袖を切る。いつまでもちゃらちゃら男呼ばれたら困るわな（笑）。それにあんな袖で台所で洗いもんしますわ言うたら働きにくい。それが『留袖』やわね。いまの留袖という意味違うて、袖を切って留袖になるわけや」。

袖の振り方の優劣を「振る舞いが悪い（良い）」といい、着物の畳み方から「折り目正しく」など、呉服屋はまさに日本語の湧泉でもあるという。

そして、「振る」という行為にも多くの意味が隠されていると彼は考えている。

「振袖は巫女の舞から始まっとなるから。神社でもじゃらじゃらと風に揺れたり、しめ縄に紙垂つけますよね。振るといことは、エネルギーを増幅さすこと。巫女が踊る時もじゃらやるやん。あれは音と、振るといことによって神さんと呼んでるんよ。そして例えば沈殿してるのを1回振るといのは、再生するわけ。振るとい行為の中に、エネルギーをもう1回沸き起こすとか、そういう意味が全部あるわけや。妖艶（なもの追求）というより、その異様な中で振袖が成立してる」。

で一発で割れるやん。あれを耐えるということは節があるからやろ。せめて成人というものすごい大事な、女の人が一番美しい時を大切にせなあかん」。

千年以上の視野をもって創作をする山口氏に位置づけられる振袖は、まさに、人生の節目に選ぶ「勝負服」である。成人して振袖を着る、それは日本人としての覚悟を決めるというわくわくするほど前向きな意味合いを帯びて見えてきた。

インタビュアー／腰塚光寛、腰塚玲子（KAPUKI）



山口源兵衛

やまぐちげんべい／帯匠。1948年、京都市中京区室町生まれ。創業280年を超える日本随一の帯匠・菅田屋源兵衛の十代目。代々受け継がれた技術と希少な素材、革新精神で山口氏が生み出す作品は、伝統工芸という枠を超えた芸術として高い評価を受ける。2003年、日本文化デザイン大賞受賞。前衛舞踏家・田中泫の衣装を手がけ、画家・松井冬子の絵を帯で表現するなどコラボレーションも幅広い。2021年7月、「KAPUKI ARTS」の第一弾として展示を行う。

家族の宝ものになる

— 腰塚家のはなし —

着物も家族も、自由に楽しく形を変えながら

家族全員で着物を着て写真を撮るなんて、10年前には全然想像してなかったわ」と話すKAPUKI店主の腰塚レイコさん。レイコさんが中目黒で着物屋を始めたのは今から8年前の2014年の春。きっかけは光晃さんが京都の着物問屋さんと始めた「Ei-ry&Obi」という着物ブランド。伊勢丹で発表会をしたものの、その後の展開が決まらずにいたところ「じゃあ私が着物屋やろう!」とレイコさんの一言がKAPUKIの始まりでした。

「当時小学生と中学生だった子どもたちも成長

し、今年息子の十一は高校を卒業しこの春から海外へ、娘のナナは今年大学4年なので就職っ只中。卒業後はそれぞれ独立し、家族一緒に暮らすのもあと僅か。母親としては嬉しいようなちょっぴり寂しいような複雑な気持ちです」

来年のナナさんの卒業式には家族全員が揃わないので、カメラマンでもある光晃さんのアイデアで、ちょっと早めの卒業記念の思い出に、みんなで着物を着て家族写真を撮ることになりました。



ナナさんが着ている赤い着物は、実はもともとは白い振袖。成人式で着た白い振袖を、卒業式の為に赤く染め替えたとのこと。

「デニム着物とどちらにするか悩んだのですが、周りから白い振袖も勧めてもらい、両方着てみてじっくりきたのが白の方でした。白に銀箔の蝶が散りばめられていて、華やかで可愛かったので成人式にぴったりだなと思いました」成人式の写真を見ながらそう話すナナさん。

「白を勧めたのは、実は大学の卒業式のことも見据えていました。白なら赤く染めても美しく、地が赤になっても箔の蝶だけが残るので、華やかで卒業式の袴に合わせても似合うかなと。着物は思い切って色を変えるだけで全く違う印象に変わるのがまた面白いんです。シチュエーションやその時の気分に合わせて、色を変えながら大切に着続けるというのはKAPUKIの提案の1つ。赤の次は黒に染めようと思っていきます。そして色だけではなく着こなし次第でまた印象は変わります」

ナナさんが着ている袴も実はスカートとして着られるようにデザインされたもので、卒業式後

に謝恩会があるならトップスを変えればボリュームのあるスカートとして着ることも。レニコさんは普段これをスカートとして着ることもあり、決まった着方以外にも自由なコーディネートを楽しんでいるそうです。



本当にいいものは、想いとともに世代を越えて受け継がれていく



「母が今日着ている着物は、私がナナの成人式に着た訪問着。私が着ているのは、母が仕立てた摺型小紋の着物を借りました。こうやって、着物は世代や体型を問わずに着られるのがいいですよ。着物屋の私が言うのも何ですが、決して安い買い物ではないので、みんなでシェア



しながら着物を楽しんでいきます。十一はパパのお下がりのデニム着物を中学の卒業式で着たのですが、背が伸びたので今は羽織として着ています。デニム素材はカジュアルに着やすいので、着こなしの幅が広い。海外へ行く時も、日本人のアイデンティティとしてこの着物を持って行ってもらえたらと密かに思っています。かさばるなあなんて文句を言われてますけど(笑)」

ナナさんがコーディネートで合わせたバッグは、お母様の桂子さんが30年以上愛用しているもの。「本当にいいものは、ちゃんとメンテナンスしながら大切に使えば何世代も受け継いでいってもらえる存在ですよ。母もたくさんは

人生の節目を大切に、自分らしく生きていく

持っていませんが、いいものを長く大切に使用している姿を私もずっと見てきました。ものだけでなく、その気持ちを子どもたちには受け継いでもらいたいですね」

81歳、51歳、21歳とちょうど30歳違いの祖母、母、娘。「母は商売をしていたので、家のことをしている姿はほとんど覚えていません。本当に忙しく働いていましたが、家族の誕生日やお正月は必ず全員集合するのが決まりでした。親戚が写真館をやっているので、家族写真はよく撮っていましたね。実家には私の七五三の家族写真と同じ着物を着たナナの時の写真が並んで飾られています。とても良い思い出になっています。今日の写真も、30年後にはナナが私の歳に、私は母と同じ歳になっています。どうなっているか楽しみです」人生の節目で残す家族写真。そこには家族の思い出の数だけ宝ものがありました。







意志をまといえ。







十三詣り

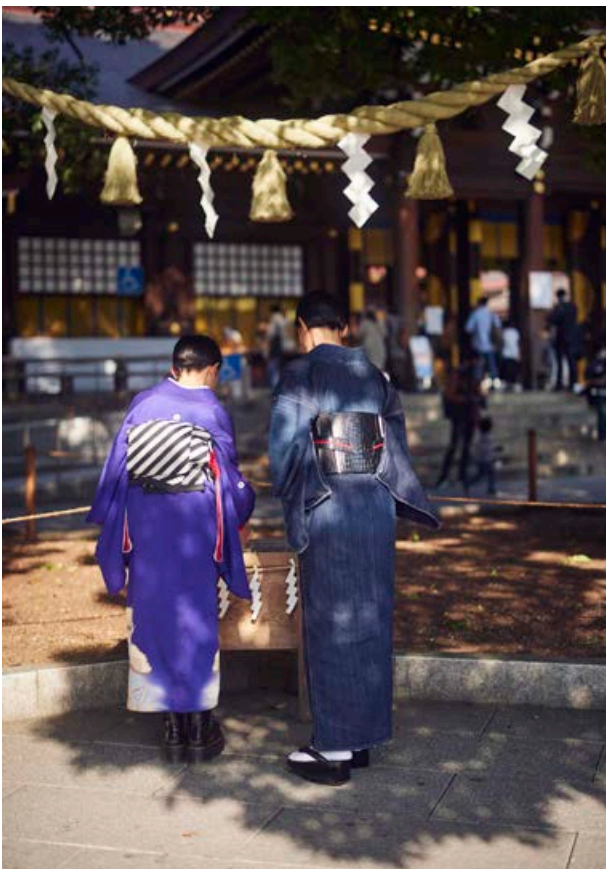
— TOKOとTOTOのはなし —



「十三詣り」
 数え年で13歳になった子どもの健やかな成長に感謝し、
 虚無蔵菩薩を参拝する人生儀礼の1つです。
 虚空蔵菩薩（こくうぞうぼさつ）とは、
 13番目に誕生した菩薩様のことです。
 知恵と福德を司る菩薩様とされています。
 これに因んで「十三詣り」は
 「知恵詣り」「知恵もらい」とも言われ、
 知恵と開運を授けてもらうお参りとされています。
 正式な装いは、男の子は羽織袴、女の子は大人の
 晴れ着とされており、初めて大人の寸法の晴れ着を
 着せることで、着物に馴染んでいる自然な立ち振舞いを
 身につけさせたとも言われています。

アパレルPRやDJとしても活躍していた
 TOKOさん。DJ DARUMAさんと結婚
 し二児の母となってからもそのファッション
 センスやネットワークを活かし、キッズブラ
 ンド立ち上げや友人のブランドのファッショ
 ンアイコンとしても活躍しています。今年、
 娘のTOTOさんが数えで13歳となり、
 TOKOさんの着物を着て十三詣りを行いま
 した。「『十三詣り』で娘が着たこの着物
 は、私が母から譲り受けた着物です。そし
 て、私が着ている着物は母がKAPUKIさ
 んで購入したデニム着物と帯ベルトです」。

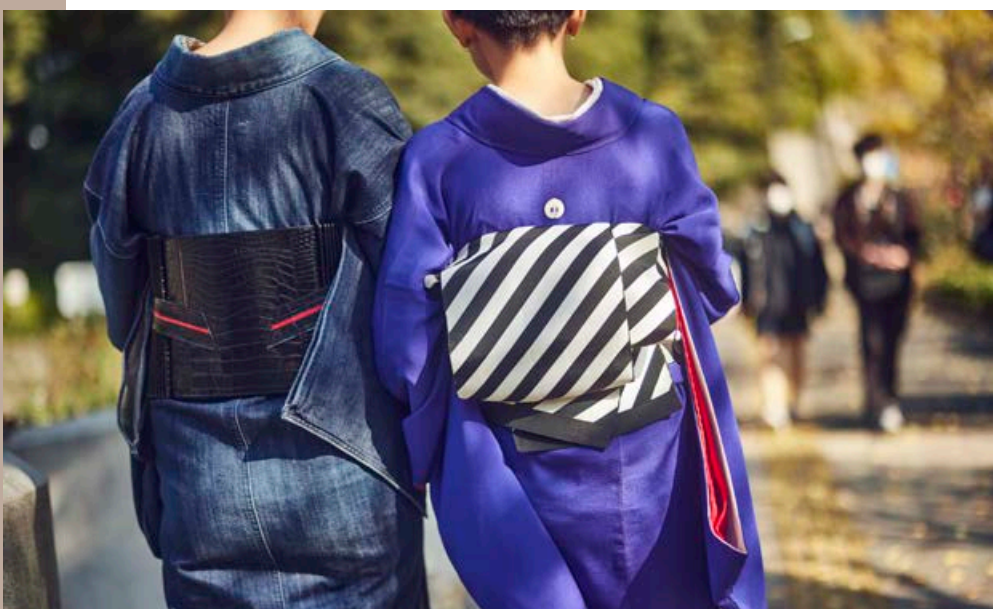
スタイリストをしていたTOKOさんのお母
 様はアンティークを中心に着物をコレクション
 ンされていきました。日本の伝統工芸、職人の
 手仕事の素晴らしさやそのクオリティーに魅
 了され、美しいと感じた着物を購入している
 と、自然とアンティークが集まったというま
 す。この着物も、アンティークを多く扱う目
 黒の着物屋「池田」さんで購入されたもので
 す。また、古いアンティークの着物が好き
 な一方、KAPUKIの革新的な個性もおも
 しろいと魅力を感じたそうで、初めて訪れた



際、すぐにデニム着物と帯ベルトの購入を決められました。

「実家に帰り、母の着物を見せてもらったことがあります。母が大切に保管している着物はどれも繊細で美しく、素晴らしいものばかりでした。そしてその際、私が「いつか自分でも着られるんじゃないか」と思う着物をいくつか選ばせてもらいました。今日娘が着ている着物は、特に発色の良い色が気に入っています。私が息子の卒園式に着ようと譲り受けたものです。娘の十三詣りでは、彼女の希望でドクター・マーチンのブーツをコーディネートしました。普段はスカートさえ履かないので、着物を窮屈がらないかと少し気になっていましたが、実際に着てみたら楽しかったです。『また着たい!』と言ってくれました。足元をブーツにしたのが良かったのかも

しれません(笑)。もっと自由にその人らしく着こなせば、着物も楽しめるんですね。着物には興味のなかった娘が、十三詣りをきっかけに、興味関心の幅を広げてくれたことは母としてとても嬉しく思います」。





少女よ、武器を持て。









未来対談

私たちが信じる 「好きなものを 纏うこと」の力

早くからモデル／アーティストとして活躍してきたカルチャーアイコン・MANON。16歳でKAPUKIの振袖デビュールックのモデルを務めてから、誰よりも多くKAPUKIの振袖に袖を通してきた。

そして、フリーランスのモデルとして支持を集め、2021年「水曜日のカンパネラ」の2代目ポーカーとして抜擢された詩羽。KAPUKIの振袖2023年の成人式に向けた最新ルックでモデルを務める。

MANONと詩羽、二人は実はプライベートで仲の良い同級生であることが発覚！モデル、アーティスト、クリエイターであり、唯一無二の魅力とブレない自分らしさを持つ二人の初対談が実現した。KAPUKIの振袖について、ファッションについて、今の自分と仲間、そして未来について。最新ルックの撮影を終えた夜の渋谷で、二人が語ってくれた。

「自分に似合う着物、

初めて見つけた」って思えた。



「MANONさんが初めてKAPUKIの振袖を着たのは16歳の時。MANON（以下M）撮影前にインスタで見たとときに、シックでクールでアダルトなブランドだと思ったんです。私なんか子供だから大丈夫かな？って正直不安もあって。でも撮影当日に着てみたら、自分で言うのもおかしいですが、めちゃくちゃ似合ってた。初めて着物で自分に似合うブランドを見つけた気がして本当に嬉しかったです。」

「2年目の撮影では新作も加まりました。」

M「1年目は振袖の撮影も初めてだったので緊張していました。洋服と着物ってやっぱりポージングが全然違うから。着物として間違いないようにちゃんと映らなくちゃという意識もありました。でも撮影の中盤で、關鍵の帯のスタイリングが出てきて、ヤバいと思いましたね（笑）。もちろん良い意味で。觸れてロックやバンクなイメージがあったから、ちょっとふさげてこう指を立ててロックなポーズしたら、それがルックの写真として採用していただいていたんですね。これ使われるんだ！とびっくりして。ああこういうのもありなブランドなんだな。着物としてももちろんきちり作られているけど、はみ出していくこと、自由に楽しむことが許されるというか。許容範囲が広いブランドなんだと思いました。」



— 詩羽さんは今日がKAPUKIの振袖との初コラボ。
詩羽(以下U) 私もその骸骨の帯を、今日の撮影の最初に着ました！ しかも振袖はデニム地だったんです。デニムだからしっかり重さもある。一般的な振袖って、淡い柄がたくさん入っていたり、素材もつるつるとしているイメージがあるじゃないですか。それがデニムのかっこいい雰囲気と着物が合わさると、こんなに振袖って面白くなるんだなって。それが撮影の「着目」だったので、すごいテンションが上がって、この撮影は絶対楽しくなるなと思いました。それから今日最後に着たのは、ミニ丈だったんですよ。

M え、振袖でミニ丈??

U ミニ丈にタイツだったの!

M えー!? 足が見えるってこと?

U そう。だから本当に、許容範囲が広いというが、普通でいたくない人、自分のスタイルがあって尖っていききたい人には最高のブランドだと思います。

M (詩羽さんの撮影写真を見て) わー! ほんとだ。ミニ丈のスタイリングかわいい!

私の母もKAPUKIの着物や写真見ると、かっこいい! っていつも言っていて。若い子だけがかっこいいっていうので終わらない感じ。大人から見てもかっこいい尖り方なんですよ。

U そうそう。年代を超えて受け入れてもらえるかっこよさがあるよね。

若い子だけが「いい」っていうので終わらないブランド。大人から見てもかっこいい尖り方。

— MANONさんは、夏にKAPUKIの振袖を着て実際に前撮りを。

M 16歳で初めて着た時から、自分が20歳になるときに絶対に着たいと思っていたので、迷いはなかったですね。20歳の自分で着られるのは人生で一度しかないし、やっぱりかっこよくなりたいから。母も、KAPUKIのしかないでしょって(笑)。二つ目は正統派の着方にして、二つ目は少し遊んだスタイリングにしました。

U 足元はブーツなんだ! めっちゃかわいい! ヘアメイクもかわいい!

M ブランドの宣言に『運命を感じないなら着ないでほしい』というフレーズがあるのを覚えていて、まさに運命を感じたという感じだったかな。

U 私が今日の撮影で思ったのは、すごくあったかいブランドだなって。ブランドの皆さんも撮影に関わるスタッフさんも、変な上下の関係がない。その雰囲気心地よくて、振袖のことをいっそう好きになっちゃう。着物自体はあんなに尖ってるのに(笑)、作ってる人たちはすごくフラットで暖かいついて、そのギャップが嬉しかったですね。

はみ出していくのが許される。許容範囲が広い着物。



年齢の境界線はなくて、何をやっているか、何を楽しんでいるかで、大人かどうかが決まってくるんじゃないかな。

— 二十歳になるとのこと。大人になるとのこと。

U 小さい頃は、20歳になったら自動的に大人になると思っていただけ、そういうものじゃなかった。年齢に良い意味で境界線はなくて、やっていることだったり、楽しんでいることだったり、大人かどうかって決まってくるんだなって。19歳の最後の日が終わって20歳になったからといって、急にレベルアップするわけではないから、やっぱり努力が必要なんだなって思います。20歳になったからって身長も伸びないし(笑)。

M 私は1月生まれなので、これから20歳になります。でも20歳になったからって何かに物おじするようになるのは嫌だなって。もう10代じゃないんだからやめておこうとか、諦めよう、となるのは違うと思う。むしろ20歳を迎えてからの方が、10代の時よりも尖ってきてるんじゃない? って勢いでいきたい!

U 私は19歳でも20歳でも、20代でも30代でも、いけるところまでは何歳でも、おばあちゃんになるまでかっこよくいたい。自分の最高地点というものがあっても分らないけど、そこに行き着くまで、寄り道とか失敗とかいっぱいしていきたい。失敗できるのって若い時の方が簡単だと思うんです。だからこそ20代こそ色々なことに挑戦したいし、経験したい。

20歳になったからって何かに物おじするようになるのはイヤ。

— 一人にとって、かっこいいとは?

M、U 自分に自信がある人!

M それから自分の身近で感じるのは、キャリアもあって成功していてかっこいい人たちって、下の世代をちゃんと持ち上げてくれる。私もそういう人たちがいたからこそ、今まで自由に活動してこられた。自分が20代、30代になっていくときに、そういう人間であれたいなってすごく思いますね。



ファッションは武器であり防具。自分の自信を纏ったためのもの。

— ファッションについて。

U 私にとっては、武器であり防具。自分の自信を纏うためのものです。

M 武器っていうのはすごく分かる。私はけっこう人見知りだし、弱い部分もある。そういう人ほど派手な服を着ることって多いと思う。

U 詩羽も〜! (笑)
M 弱い部分もある人が、好きな強い服を着ることって強くなっていけるんだよね。

U 私は自分の好きじゃない服を着ている自分って本当に好きじゃないので。そういうときは人に会いたくない。友達に会う時も、私は絶対におしゃれしたい!

M 学校に行く時はどうしてる?

U おしゃれしてるよ! セツかく人に会うなら私はバッチャチにきめてく。

M 私は周りを見ると、うくん合わせなきゃ? って思う時もあるけど、でも結局自分が好きな格好をしたいし、周りにもそういうスタイルの人だと思われているから、まあいっか! って開き直ってる(笑)。目立ってやろうとは思ってないけど、やっぱり可愛いと思う。

U セツかく見られるんだったら、一番かわいい状態で見られたいよね!

— 尖ったファッションや自分が好きなファッションをするのに躊躇したり、自信が持てない人も。
M 私も目立つのは恥ずかしいって思っちゃう側でもあるから、そういう人でもやれるよって言いたい。実は難しいことではないから。
U そうそう、かっこいいものを着るのって挑戦だと思う。やってみるしかない。
M それにやっぱり着てみないと自分に似合うかって分からないものだから。見ているだけにしよう、着るのはやめてお

こうって後悔より、着てみて自分でトライした方が絶対いいと思う。
U 私が今好きなのは海外のファッションスタイル。ボディラインがピチッとする服とか露出がある服って、日本だと色々なこと言われるし、それで何か危ない目にあった時にそういうファッションのせいで言われることもある。それってすごい不自由だなと思っていて。ミニスカだっけはきたいし、ピチピチの服だっけ着たい。肌だっけ出したけど、どうのこうの言われるのって本当に不自由。でも実際着てみるとやっぱりかわいい。好きなものを、かわいいと思うものを私は自由に着ていきたい。



MANON

アーティスト、モデル。2001年生まれ、福岡県出身。dodo、LEXなど新鋭アーティストから藤原ヒロシ、ケロ・ケロ・ポニトまで多岐のコラボも話題になってきたアーティスト活動、ストリートからモードまで着こなすモデル活動と、音楽・ファッションを横断した活躍で注目を集めている。

大人やすごい人の力があつたらすごいものができるのは当たり前。若い人たち、まだ足りない人たちが集まって作るものがどこまでいけるのか？今はそこに一番興味がある。

— 若い人の力があつたらすごいものができるのは当たり前だから。若い人たち、まだ色々な足りない人たちが集まって作るものが、どこまでいけるのか？ っていうのが一番興味ある。若いからこそできることって絶対あると思っています。

M いいねー！ 自分だけが、つてなるんじゃないって、みんなで頑張っていこう！ みんなで協力してかっこいいの作ろう！ っていう最近の空気やムーブメントが私は好きですね。それから私は、海外でライブがしたいです。最近国を超えたアーティストとのコラボ活動も増えてきたので、海外でもパフォーマンスをしたい。小さい野心ですけど。

U それは小さくない！ でもそれを小さいってことにして、次にまた新しい大きな野望を抱いていくっていいよね。

M いい言葉ー！ それを借ります(笑)。
U 同年代の子と一緒にものを作れるチャンスを増やしていきたいから、MANONちゃんとも同じ雑誌やライブに出られたら最高だなんて思う。

M 今回は対談だったから、今度はファッションでも音楽でもコラボできたらいいよね！ (終)

— 家族、特に母親の影響について。

U うちの母がすごくおしゃれで、着物もたくさん持っていた人。20代中盤くらいには私服ですって着物を着ていたみたい。着物で赤ちゃんの私を抱っこしている写真もあります。お母さんのファッションの影響はすごく受けていると思う。最近も母の着物を私が現代風のスタイリングにして、友達とアートワークを作ったりもします！

M 私も母からファッションの影響も音楽の影響も受けてますね。私が生まれた時に、母が子供服の店を始めました。父がフランス人なので、みんなでフランスに服の買い付けに行ったりして、家族旅行のような感覚でした。そこで色々な国の服を見たり着たりして、その時の影響は大きいと思います。自分が着る振袖選んだときも、母がいいね！ って大賛成してくれて。影響を受けているだけじゃなくて、好きなものが一緒に

— 今興味があること。未来に抱いている野望。

U 今大事にしているのは、同年代の子たちとものづくりすること。私は今水曜日のカンパネラとして活動を始めたんですが、そこでやりたいことの1つが、自分と同世代のクリエイターやアーティストと一緒に成長していくこと。まだ世の中から見つかっていない人、まだ成功していない面白い人と一緒にものづくりをしていきたい。それは今自分がこういう立場になったからこそ、与えられるものかなって思うんです。今までたくさん人にもらってきた分を返していきたい。大人やす

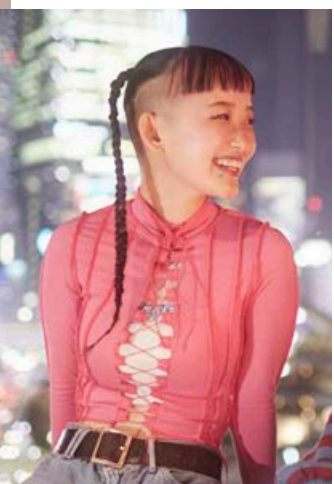
— 幸せだなんて思いましたね。

U うちの逆もあるよ！ 私が今好きになった服やブランドを、母が好きになることもある。そういう循環って面白い。好きなものって年代は関係ないよね。

私が今好きになった服を母親が好きになることもある。そういう循環って面白い。



日常的に着物を着ていたというお母様。抱かれているのは幼い頃の詩羽さん。



詩羽 (utaha)

アーティスト。2001年生まれ、東京都出身。高校卒業後、モデル活動を行い、音楽と言葉と時間と私をテーマに、Instagramに詩と写真を投稿しながら自己表現を発信していた。2021年9月、水曜日のカンパネラの二代目・主演&歌唱担当として加入。10月には楽曲「アリス/バックingham」をリリースし話題となる。

西岡ペンシル



Nishioka Pencil

アートディレクター／図案家。西岡ペンシル代表。京都市生まれ。金沢美術工芸大学視覚デザイン専攻卒。企業の広告やキャンペーン、ブランディング、ロゴデザインからテキスタイルデザインまで様々な分野で仕事をす。鳥織図師の祖父と、京友禅悉皆屋の家に生まれたルーツを持ち、和様の美から受ける刺激・養育をグラフィックデザインやアートに通じるものとして活かしてきた。文様を単なる柄や装飾と捉えるだけではなく「時代や場に応じて複雑な意味の広がりや投影できる優れたアートプラットフォームとしての文様」を独自に制作する。2014年にはハリと東京で2つの「ニュー・文様」展を開催し大きな注目を集める。近年の個展では「文字と文様」(19)がある。

自然と人の仕業によって
文様は形作られる。
空がつくる。海がつくる。
風が砂浜につくる。
花見の季節が終わりに差し掛かる頃、
水面に浮く花びらの景色。
人はそれらを目の当たりにし、感じ、
また新たな文様を象る。



生きる文様、 世を飾る。

【蛇と髑髏】

髑髏は世情が不安定な時代に流行してきたモチーフ。魔除けであり、髑髏を傍におくことはすなわち強く生きるという決意の表れでもある。沢山の髑髏をくねくねと繋ぐ様に渡り歩く蛇の続柄を描いた。河鍋晩斎が描いた髑髏の目から這い出す蜘蛛へのオマージュ。帯匠菅田屋源兵衛の織で、化ける様に美しく力強く仕上がった。



骨董屋に売られている古い浮世絵や雛形本にも「当世〇〇」「現世〇〇」「今様〇〇」と、今をうたうタイトルがたくさんみて取れる。図案家はモチーフに、今のニュアンスと態度を盛り込み、昇華し、世に放つ。そこに今を生きる図案家の存在価値が試される。過去から脈々と続くモチーフであれば同じ。時代を超えるには文様の強度も試される。名作とよばれる文様は生き残ったのである。運良く生きながらえた文様はまた新たな時代を飾ることができる。これまでも、これからも続いていく文様の長い歴史の中で、僕が形作った文様が、新たな価値を持ち、人と交わり今を生きることができたとしたら、かけがえの無い喜びである。

【宝尽くし】

古典的な宝尽くしは打ち出の小槌や巻物、分銅、金囊など様々な宝を集めた吉祥文様ひとつひとつのモチーフは知ってはいいても慣れ親しんだものではない。それなら今の宝物を描いてみては、という着想。こちらの宝はおとぎ話に出てくる海の底に沈んだ海賊船の宝箱から出てきたイメージ。帯には、辛せが長く美しく続きますようにという思いを込め、漢字の「八」を続柄にした文様を。



Mademoiselle Yulia
マダムモアゼルユリア

着物にしかない魅力

—着物に興味をもったきっかけを教えてください。

母が着付の講師をしているので、着物に関しては母から学びました。祖母も花嫁の着付と髪結ができる美容師でした。偶然にも父も美容師だったことや、ファッションの裏舞台の世界に興味があったので、最初ヘアメイクの仕事がしたくて美容学校に行きました。美容師免許も取得したのですが、高校時代にバンド活動をしてた流れから専門学校在学中に既にDJ活動を始めてしまっていて、レコード会社と契約もしてしまい、そのままDJやシンガーとして活動を始めました。その後ファッションブランドを立ち上げたり様々な活動を並行してするようになると、海外に行く機会も増えていきました。

特にヨーロッパの人々は自分の国の文化をととても大切にしています。私は着物が身近にあったり、触れようと思えば日本の文化にはいくらでも触れられるし、歌舞伎も好きだし、読む本もいわゆる純文学が好きで、剣道をやっていたりした少女時代を過ごして来たのに、なぜ海外の文化にばかり憧れていて、日本の文化を掘り下げてこなかったんだ

ろうと疑問を抱き始めました。

それからというもの、私は趣味が歌舞伎観劇なので毎月一回、歌舞伎に行く時には”着物を着て行こう”などと自己ルールを決めたりして、自分のワードローブのチョイスの中に着物を入れることを意識的に始めました。そうすると自然と、日本文化についてちゃんと勉強したいと思う気持ちが強くなり、30歳の時に京都芸術大学に入学しました。

私の専攻した学科は、和の伝統文化という学科で、お茶や生け花、能に歌舞伎、和歌や古典文学など幅広く、それぞれの文化の起源から歴史を勉強しました。知れば知るほど、それらの文化が全部繋がっているというか、知っていることによって楽しみ方が変わることを知りました。昔の日本人にとっては当然のことであっても、現代の私たちが忘れてしまったことを知ること、季節に敏感になったり、楽しめるようになりました。特に着物は柄で気持ちや季節を表現したり、虫籠が描かれていたら、これは源氏物語の野分のシーンだとわかったり、視点がどんどん広がっていくんです。音楽にしろ着物にしろ、掘り下げ甲斐のある文化が好きなんだと思います。



—ご自身の成人式ではどんな装いをしたんですか？

アンティークの振袖です。私が古典の色柄が好きなのを知っていて、母が借りてきてくれました。当時私はオレンジ色のおかっぱヘアだったので、着物も朱色にしたいと決めていました。母は洋服業界にいたこともある人なので、着物と洋服のそれぞれの良さをわかっていて、色の合わせとかは当時着物に関して大した知識のない私の意見を尊重してくれました。

着物って、お母様やおばあ様の着物を帯や小物とセットで譲り受けることがあると思いますが、そのコーディネートそのまま着る必要はなくて、時代やその人のパーソナリティによって変わってくるものだと思います。アンティークでとっても素敵だったらそのまま着たい！って私は逆に思ってしまうかもしれませんが、着物を着る楽しみはワンピースのように一枚着て終わりではなく、着物に帯、半襟

や帯揚げ、帯締めに帯留めなど自分らしさを合わせ方によってどんどん投影できる衣服だと思っています。

—今の振袖ってどういふふうに見えますか？

最近、逆に着物を着たい方が多い気がします。やっぱり着物が非日常になってしまった今、成人式という特別な日に普段着られない着物を着てみたいと思われるのかもしれないね。だけど、人と同じものは着たくないというお話しはよく聞きます。皆さん見慣れている、柄がすごくたくさん入っている振袖よりも、もっとファッション感覚でかっこいいものが着たいのかもしれないね。KAPUKIさんもそうだけど、最近無地の振袖が増えてきていますよね。今回着た振袖の江戸小紋って遠目には無地に見えてすっきりしていて、でもよく見ると細かく凝った柄が入っていて、すごく素敵だなあと思いました。

—ファッションとしての着物の面白さはどんなところにあると思いますか？

洋服って形が決められてしまっていて、自分が服の形に合わせていくけれど、着物はひとつしか形がなくて、しかもそれが何百年と変わっていないという事実がまずすごいなと思います。それを体にまとわせることで、着物のほうが自分に合わせてくれる。だから多少、体型が変わっても着



成人式は明治神宮に家族でお参り。

られます。

そして、着ただけで終わらないところも魅力です。帯をして、帯揚げをして、帯締めをして、帯留めをして、とやっていくと、自分だけのストリーを作っていくことができると、例えば、これは先日私がしたコーディネートなのですが、雪持ちの松（雪の積もった松）の半襟に、雪輪がぼかして染められた着物、帯は冬の先に待っている春を思わせるような草花の文様が織られた帯、帯留めは鹿にする。そうすると、雪の降る松の下で春を待っている鹿というストリーができあがります。洋服では、服をデザインしたデザイナーの世界観に自分が合わせていくわけですが、着物はこんなふうに分のクリエイティブな頭を使える。そこがたまらなく面白いところです。そのストリー創作をもっと楽しくするために、柄の意味を知っておくといいですよね。さらには、その時の季節や自分の気持ちを、言葉ではなく柄で表現できるというのが日本人らしくてとても興味深いところだと思います。私、実はとても人見知りなので、そういう意味でも着物は自分に合っている気がします。

—着物のどんなところに可能性を感じますか？

着物には今を生きる私たちにとってのヒントがたくさん詰まっていると思います。私、明治時代がすごく好きなんです。江戸という熟成された文化に、西洋の文化が入ってき

て、それを取り入れて、自分たち流に新しいものを作り出す。中にはすごい変なものもあったりするけど、その試行錯誤している感じを見ていると、エネルギーに溢れていた時代だと思えます。同様に今、世の中が大きく変わろうとしているタイミングで、私たちが明治時代から学ぶものは多いというか、当時と近い部分があるんじゃないかなと思えます。

着物は裁断が直線で、しかもミンデンではなく手縫いなので簡単に反物に戻せるので、何代にも渡って仕立て変えて着たり、別の用途にも使って、最後には雑巾にして。さらに燃料にして、灰になったら肥料にして。究極のサステイナブル。物がなかったから使い倒すっていうのも当然あったでしょうけれど、現代と比べたら逆に豊かな価値観じゃないかと思えます。

今のファッションって、ファッションだけで成立しているなと感じることがあります。私が好きだった時代のファッションって、音楽やアートなど、もっといろんな文化と通じていた。私自身、音楽やファッションに興味を持ってやってきて、文化が好きで人間です。だから、その文化がクロスオーバーしていることに興奮するんですけど、着物もやはりいろいろな文化と関わっています。だから着物は私にとって、様々な文化への好奇心の扉を開いてくれるものでもあるんです。

インタビュアー／腰塚光晃、腰塚玲子（KAPUKI）



MADemoiselle YULIA

（マドモアゼル・ユリア）

DJ／着物スタイリスト。10代からDJ兼シンガーとして活動を始め、活動の幅は着物のスタイリング、モデル、コラム執筆等多岐に渡る。パリを始めとする世界でのファッションウィークやファッションイベントでDJとして活躍中。2020年に京都芸術大学を卒業。大学や着付師である母親や祖母から学んだ知識、これまでファッションや音楽の世界で培ってきた経験や感覚を元に着物のスタイリングを開始。昭和初期に建てられた九段下にあるKUDAN HOUSE(旧山口萬吉邸)での着付教室を月に一度開催中。



何度でも、ハタキになってやる。







K A P U K I の振袖

BEGINNING

振袖―はじまり

KAPUKIを始めて3年が経った頃、当時高校生だった娘宛てに振袖メーカーからのカタログが届き始めました。次々に届くダイレクトメールを開けても開けても、そこには時代錯誤の原色花柄の振袖ばかり。全くもって着る側のことなど考えていないかのように思えるビジュアルが溢れかえっていました。そしてそこには私が娘に着せたい振袖が見当たりませんでした。

ならば自分たちで作ろうと、私たちが信頼と敬意を寄せる京都の老舗メーカーや作家、職人の方々にこういうものが作りたいと相談し、何度も打ち合わせを重ね、制作を進めていきました。もともとが和装業界にいない私の振袖デザインのアイデアは、その業界で長くお仕事をされている

葉があります。モード（ファッション）のドキドキ・ワクワクする高揚感、今この時代に何を感じて、選び、どう着こなすかにあると思えます。着物をファッションとして発信するKAPUKIは、二十歳の門出に袖を通した瞬間、DNAに刻まれた日本人としての美意識が蘇り、その高揚感を感じる一枚を作ることこそが、この時代に生きる新成人に対する責任でありプライドだと思っています。

「KAPUKIの振袖を選んでよかった!」「普段には無いこんな高揚感を感じられるなら、また着物を着てみたい!」そう思ってもらえることが、私たちの何よりの喜びです。

KAPUKIの振袖は、成人式だけではなく、長い人生の中で、色や形を変えながらずっと着続けていける振袖を提案しています。例えば、シンプルな色無地の振袖であれば見た目がクールで素敵なだけではなく、帯合わせによって雰囲気を変えれば、様々なシチュエーションで着ることができます。また、最初に淡い色で作っておけば、あとで色を濃く染めることはできますし、袖を短く仕立て変えれば結婚してからも着ていくことができます。元来着物というものはそういうもの。今の時代に合ったサステイナブルな衣服です。

また、KAPUKIはスタイリングをとっても大切にしています。旧来の振袖にありがちな過剰な装飾は排除して、シンプルでありながらも品のあるオーセンティックなスタイリングや、今の時代を感じさせるブーツやアクセサリーを合わせたストリートMIXなスタイリングなど、洋服のスタイリングをする感覚で着物のスタイリングをしています。自分を

る方々に驚かれ、時にそれまでの常識を破ることもありました。でも、職人の方もなんとなく当たり前としてきただけで、「確かにそういうやり方もありだね」と皆さん面白がって一緒に協力をしてくださいました。また親しいグラフィックデザイナーの方にデザインを依頼して、モダンな柄をゼロから創作することもあり、着物がモードとして息を吹き返す現場を何度も目の当たりにしました。

FASHION

振袖―ファッション

KAPUKIのコンセプトに「KAPUKIは着物の常識を破ることを恐れない。今、この日常から立ち上がる美意識を、ためらわず形にする。」という言

窮屈な型に押し込むのではなく、自分の発想で楽しむこと、「自己肯定」を支えてあげたい。それが本来のファッションであり、着物も同じだと思うのです。着ることで自分に自信が持てるようになる振袖、それがKAPUKIの未来のビジョンなのです。

FUTURE

振袖―未来へ

SNSの普及により、全国のファッション感度の高い若者たちがうちの振袖を見つけてくれて、嬉しそうに着てくれるのを目の当たりにすると、やってよかったなと心から思います。成人式なんて出たくないと思っていたけど、KAPUKIの振袖なら着たいと思ったとか、SNSで見つけて絶対この振袖が着たいと思って九州から来店されたとか、一目で運命を感じたとか。商売しながら、ありがとうございますとお客様からこんなにも言ってもらえて、こちらこそありがとうございます、という気持ちになります。ありがとうの連鎖がこんなにも気持ちいいことなんだと教えてもらえて、KAPUKIで振袖を始めて本当に良かったと思います。

振袖をきっかけとして、若いうちから日本文化への興味や日本人としての審美眼が育まれたら、日本の未来にとってすごく意味があると思いますし、それを実感できる循環が見えてきたところ。それがKAPUKIの偽らざる現在と未来への確信です。





1.
振袖「破れ扇」¥660,000
帯「金彩稲妻」¥253,000
帯揚 ¥14,300
帯締 ¥61,600
ぽっくり ¥121,000



1.
振袖「五つ紋付鳳凰」
帯「紅縞」¥132,000
帯揚 ¥14,300
帯締 ¥61,600
グローブ ¥26,400
草履 ¥36,300



1.
振袖「デニム髑髏」¥165,000
帯「蛇と髑髏」¥352,000



1.
左 / 振袖「デニム 1yr」¥110,000
帯ベルト ¥79,200
中 / 振袖「デニム髑髏」¥165,000
帯ベルト ¥93,500
右 / 振袖「デニムケミカル」¥132,000
帯ベルト ¥33,000



2.
振袖「蝶乱舞白」
帯「桃山摺箔」



2.
振袖 (外)「鱗牡丹」¥330,000
振袖 (内)「漆横段」¥330,000
帯ベルト ¥93,500
ぽっくり 参考商品



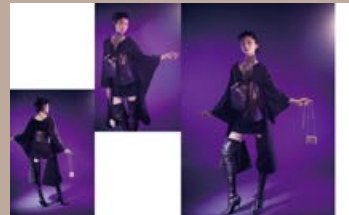
2.
振袖「入古花菱」¥242,000
帯「白七宝」¥198,000
帯締 ¥61,600
ぽっくり ¥35,200



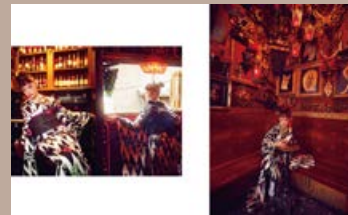
2.(左から)
振袖「幸縫取雪輪」¥275,000
帯「割れ狛菊」¥132,000
帯揚 ¥14,300
草履 ¥77,000



3.
振袖「月照乱華」¥550,000
帯「白七宝」¥198,000
帯揚 ¥14,300
バッグ ¥110,000
ぽっくり ¥40,700



3.
振袖「太子間道」¥220,000
帯「革漆」¥286,000
リングブレスレット ¥25,300
(NOBORU SHIONOYA/03-3486-4490)



3.
振袖「あい松」¥330,000
帯「漆市松」¥132,000
草履 ¥82,500



振袖「紗綾形」¥110,000
帯「漆市松」¥132,000
ぽっくり ¥35,200

振袖「線牡丹」¥220,000
帯 参考商品
帯揚 ¥18,700
帯締 ¥9,900
ぽっくり ¥35,200



4.
振袖「雪佳舞蝶」¥792,000
帯「乱菊の舞」
帯揚 ¥14,300
帯締 ¥61,600
草履 ¥82,500



4.
振袖「飛蝶紋」¥330,000
帯ベルト ¥93,500
ぽっくり ¥35,200



4.
振袖「扇縞黒」¥275,000
帯ベルト ¥93,500
草履 ¥77,000



振袖「漆横段」¥330,000
帯 参考商品
帯揚 ¥8,800
草履 ¥77,000

振袖「叢雲」¥100,000
帯「紗綾形」¥132,000
帯揚 ¥18,700
草履 ¥82,500

MODEL Miro
PHOTOGRAPHER Mitsuaki Koshizuka
HAIR&MAKE Masayoshi Okudaira
STYLING Reiko Koshizuka
KIMONO DRESSER Yoko Tamaki



5.
振袖「蝶乱舞黒」

MODEL Utaha
PHOTOGRAPHER Mitsuaki Koshizuka
HAIR Kunio Kozaki
MAKE Ebara
STYLING Reiko Koshizuka
KIMONO DRESSER Yumeho Kobayashi, Sumiyo Horie



3.
左 / 振袖「百合」¥275,000
帯「白七宝」¥198,000
帯揚 ¥14,300
帯締 ¥61,600
ティアラ ¥38,500(ecoRAL)
草履 ¥82,500

右 / 振袖「写華」¥275,000
帯「紫七宝」¥198,000
帯揚 ¥14,300
帯締 ¥61,600
ティアラ ¥38,500 (ecoRAL)
草履 ¥82,500

MODEL Kanon Hirata
PHOTOGRAPHER Mitsuaki Koshizuka
HAIR Tetsu
MAKE Ebara
STYLING Reiko Koshizuka
KIMONO DRESSER Yumeho Kobayashi, Sumiyo Horie
WRITER Maki Kakimoto

MODEL Miiya Kudo, Amisa Nix, Maria Shindo, Lisei, Nanami Keyes
PHOTOGRAPHER Mitsuaki Koshizuka
HAIR & MAKE Masayoshi Okudaira
STYLING Reiko Koshizuka
KIMONO DRESSER
Yumeho Kobayashi, Sumiyo Horie, Yoko Tamaki, Tomoko Katayama

CREDITS

PRODUCER

Reiko Koshizuka

EDITOR IN CHIEF

Mitsuaki Koshizuka

EDITORIAL DIRECTOR & DESIGNER

Nishioka Pencil

COPY WRITER

Kana Koyama

EDITOR

Chigusa Taguchi

CASTING DIRECTOR

Shimana

KAPUKI STAFF

Yumeho Kobayashi

Maiko Asami

Takako Uemura

Mutsuki Watanabe

Ai Mouri

Himawari Yamanaka

SPECIAL THANKS

BANK 30

PRINTING

HAKKOU BIJYUTSU

問合せ先

株式会社 KAPUKI

🌐 kapuki.jp/pages/furisode

📷 @furisode_kapuki

✉ furisode@kapuki.jp

☎ 03-5724-3779



公式 HP



公式 INSTAGRAM

〒153-0042

東京都目黒区青葉台 1-25-1

K2 ビルディング 1F,2F

価格はすべて税込価格、振袖は表地のみの価格となります。
掲載のない価格についてはお問い合わせください。



1.

振袖 「行儀地菊華紋」 ¥440,000



2.

帯ベルト ¥49,500

MODEL Toko, Toto

PHOTOGRAPHER Mitsuaki Koshizuka

HAIR Uco

MAKE Makiko Endo

KIMONO DRESSER Yumeho Kobayashi

WRITER Maki Kakimoto

MODEL Mademoiselle Yulia

PHOTOGRAPHER Mitsuaki Koshizuka

HAIR Aki Takahashi

WRITER Koji Yoshida



MODEL Manon×Utaha

PHOTOGRAPHER Mitsuaki Koshizuka

WRITER Nanako Irie

MODEL

Mitsuaki Koshizuka, Reiko Koshizuka, Nana Koshizuka,

Jyuichi Koshizuka, Keiko Miki

PHOTOGRAPHER Mitsuaki Koshizuka

HAIR Uco

MAKE Makiko Endo

STYLING Reiko Koshizuka

KIMONO DRESSER Yumeho Kobayashi

WRITER Maki Kakimoto



MODEL Genbei Yamaguchi

PHOTOGRAPHER Mitsuaki Koshizuka

WRITER Koji Yoshida

FURISODE

IS

FREEDOM